

## オン・ザ・ロード

text by Taku Miki  
illustration by Pato Yanagihara

作家 三木卓

# わが港町 大連

今年、七十九歳になった。よく生きたものだと思う。

今、思い出すのは、少年時代をすごした中国大連の日々である。ぼくは当時、小児マヒにやられて、母親がぼくをおんぶして、マッサージやハリに通った。歩くことが出来ない子どもは、それでも少しずつよくなり、やがて歩けるようになっていった。

大連の町は、美しい町だった。ぼくは母親の背中から町を眺めた。

大連の町の基本はそもそも、ロシアがつくった。日清戦争のあと、ロシアは大連を港町として建設した。ロシア人は、

この（北海の真珠）という町を愛した。その港町は、日露戦争で日本が統治することになった。ロシアは、不凍港である大連を大切にしていた。日本もそうだった。

ぼくはこの町に小学校の二年生までいた。アカシアの花が町にあふれた。中国人たちは、その純白の花を天ぶらに揚げて食べて、日本人もまねをした。ぼくはやがて奉天や新京で暮すことになるが、何かという大連の町を思い出した。大連はすばらしい町だった。ぼくはハルビン学院に胸をとどろかせて、あこがれていた少年だった。満州の空は暗かったの

で夜空の星が素晴らしかった。ぼくの中のもう一人の少年は、天文学者になりたいたいと思い、夜空を見るのが好きだった。ぼくは大連を忘れることが出来なかった。

満州から引揚げてくる、ということになるのだが、日本は知らないところである。引揚げなら大連へ引揚げたい、と思った。もちろん、そんなことは出来ないのだけれど。

戦後、大連に行って住んでいたアパートなど見て来た。アパートは、中国人が住んでいて、玄関の鍵がいろいろなひっかきぎずの痕をのこしていた。その中には、ぼくがつけたのもあったはずである。大連でいっしょに暮していた家族はみんなあの世にいつてしまった。ぼくはひとりで大連のことを思っている。

その大連は、中国人たちが元気で生きている。古いアパートには今は今の人が住んでいる。埃が階段につもっていたりする。はるかな時をかぶっている。それに気づくと、ここにも、はるかな時があることを、思ってしまう。

母親はもう、いないが、ぼくは母親のことを忘れることが出来ない。大連で、二人はがんばった。

母親は、ぼくのことを一番心配していた。母親は愛してくれた。心から心配してくれた。ぼくはありがたく母親のことを思うことができる。

大連は、満鉄の町でもあった。満鉄の本社は、ロシアの女学校を利用していた。これはおもしろかった。

ぼくの父親は、満鉄社員会というところで働いていた。社員会のバッジというものがあって、鉄道のレールを切ったものを、土星の環のようなものが、とりまいていた。

父親は、あまり得なポジションにはいなかったようである。ふつう鉄道医院という大きな病院にみんな満鉄の本社づつめの人は通っていたが、わが家は大連の赤十字にかかっていた。父親は、鉄道医院に行くことにこだわりのあったのではないかと思う。当時の大満鉄もいろいろな職員に格差があった。

みき たく／1935年生まれ。早稲田大学ロシア文学科卒業。出版社勤務を経て、文筆生活に入る。主な著作に詩集『わがキディランド』他、小説に『鶺鴒』、『野いばらの衣』（講談社文芸文庫）、『裸足と貝殻』（集英社文庫）他、評論に『北原白秋』（筑摩書房）他。